樋口一葉の表現

――「にごりえ」の語りを中心に――

古田芳江

はじめに

批評家田岡嶺雲が、主として文学の方面に力を注いでいた期間は、概ね一八九二（明治二五）年から一八九七（明治三〇）年にいたる数年間であった。いうまでもなく、一葉が小説を発表していた期間とほゞ重なっている。

嶺雲は、当時の四女流文学者三宅花圃・若松賤子・小金井きみ子・樋口一葉を挙げて、〈四閨秀いづれはあれど、吾は最も一葉を推す〉[注1]と、女流中の第一であると評したばかりではない。「一葉女史の『にごりえ』」[注2]と題する「にごりえ」論の中では、当世の小説家としてその技倆が〈抽んゝでいるとも評している。嶺雲が一葉の作品から特にとりあげて論じたのは、「にごりえ」だけである。嶺雲の「にごりえ」論は、嶺雲の他の文学評論の文章と比して特別な長文であり、嶺雲の小説観によって論理的に展開した文章である。

嶺雲の「にごりえ」論は、激賞に偏っていると見る向きも多いようである。しかし、「にごりえ」は、嶺雲がその出現を待ち望んでいた悲劇的文学の実作品であったわけで、まさしく激賞に価するものであったのである。「田岡嶺雲全集」所収の「一葉女史の『にごりえ』」の解題の中に

この作品で注意されるのは、第一にそこにおいて嶺雲特有の「同情」の美学、あるいは「同情」の小説論がそれにふさわしい恰好の生きた対象を得て存分に展開されていることであろう。

と書いてある通りで、嶺雲の小説論である〈同情〉の小説論の、〈生きた対象〉であると観たからである。

更に、嶺雲は、「にごりえ」を、悲劇、文学史的に言えば悲惨小説における規範であると観たからである（「水蔭の『女房殺し』」、「山田美妙」、「泥水清水」、「『闇のうつゝ』を評す」等を参照）。

嶺雲は、日清戦争後の悲惨小説を、日本文学史上に初め

て登場した悲劇である、と位置づけた人である。嶺雲は、「日本文学の短所」、「悲劇の快感」、「西欧文学の趣味」（以上は「青年文」第一巻第三号、明治二八年四月一〇日刊に同時掲載）という三つの文章によって、日本文学の進歩のために欠如しているものは悲劇であることを力説していた。嶺雲には、透谷と愛山との人生相渉論争が始まる四か月以前に、「平民的短歌の発達第二を読む」（「亜細亜」第六一号、明治二五年一〇月一七日刊）に端を発する嶺雲・愛山の〈人生相渉〉論争ともいうべき文学論争があった。嶺雲の主張は、日本文学のサブライム（崇高性）は、芭蕉の風雅においてすでに存在したというものであった。よって、「にごりえ」を悲劇の実現として歓迎したのである。

嶺雲の「一葉女史の『にごりえ』」は、〈同情〉の小説論を論理的に展開した作品論であるが、その特徴は、人間観において見出せよう。

嶺雲は、「一葉女史の『にごりえ』」の中で、お力の〈内に隠れ〉たへ霊性〉を〈同情〉によって活写している点を絶賛した。次は、すべての人間に〈霊性〉があるとする嶺雲の人間観を述べた文章で、同じ「一葉女史の『にごりえ』」の冒頭の一節である。

境遇は人をつくるといふ、然り、人の境遇に制せらるゝこと洵に大事と雖も、然れども人また其内奥一点の霊性、之を熱して融けず、之を鋳て而して変ぜざるものあつて存せずむばあらず。故に人を観るに境遇によれる習性のみを以て之を断ず可らず。境遇の為す所は、己欲してこれをなすに非ず、己れの罪にあらず、境遇そのものゝ罪のみ。境遇の罪を以て人に責む可らず、境遇の罪を以て人に責むるは、鉱中にあるを以て黄金をすつるもの。なり。人、病的にあらざるよりは、何等狼戻の徒と雖ども、また其中自ら隠約滅し得ざるの霊性なるものなくむばあらず。此霊性や智の謂に非ず、意の謂に非ず、純なるの情是れのみ。智や意や、真偽あり、是非あり、善悪あり。唯情や、真偽なし、是非なし、善悪なし、ありのまゝの本体なり。

要するに人の心の内奥に存在する真の精神は、〈純なるの情〉であり、〈ありのまゝの本体〉であるという。それは、境遇によって変質してしまうものではないという。材は狭斜に得たとしても、描かれる人物は、ひとしい人間であるべきだというのが嶺雲の観方である。例えば、〈狭斜の人情はひとしくこれ人間の情のみ〉（「文士の品格」、「青年文」明治二九年八月一〇日刊）と、ストレートに書いた一条もあり、嶺雲は、このことを度々書いていた。再び同論文から引用する。

小説家たるものゝ眼力は実に其美中醜を認め、醜中美を認むるの辺に在て存す。一瞥の閃光を捉へて之を其眼前に繋住し得るものは其天才なり。（中略）小説家は秦鏡

の如く心肝臓腑をも照し来らざる可らず。否らざればこれ傀儡の人間を写すのみ。所作は即ち有り、精神はなし。此の如くにして活描といはんや、活写といはんや。

吾人は一葉女史が『濁江』一篇を読みて深く作者が犀利の眼光と、溢るゝが如き同情とに服す。女史は小説家として優に其伎倆滔々たる当世に抽んづ。『濁江』一篇は売春の女を主人公としたるもの、作者は此厭悪すべき女性に向つて、無量の同情をそゝぎ細かに其性情をうつし来る。（傍線は引用者による。以下も同じ）

「にごりえ」の主人公お力には、人間性の美しさが彷彿する。この点に、「にごりえ」の最大の魅力があるのではなかろうか。お力は〈同情〉をもって、その内奥の精神を描かれているからにほかならない。嶺雲の〈同情〉論は、「にごりえ」の正当な読みを示唆するところ大であると思われる。

多くの「にごりえ」論に共通する傾向として、お力を娼婦であるとし、論者自身とは異質の人間であるという観点があるようである。一例として、今井泰子氏の「『にごりえ』私解」[注3]から次の箇所を挙げよう。

一方においてお力は、太吉から「鬼」と呼ばれることを悲しんでいるのだから、こうしたお初の憎悪の内容も当然ながら承知していたと思われる。ではさきの避けるべき「面倒な事」とは、源七一家の生活の崩壊、そのために惹き起こされる源七の家族との紛糾、生活をすでに考慮すべき源七の年齢等であった、と結論づけられる。零落した男への愛想づかしといった普通に言われる理由とは反対に、まとも過ぎるほどの配慮からお力は源七と別れたことになる。現にお力は朝之助に説明している。「女房もあり子供もあり、私がやうな者に逢ひに来る歳ではなけれど」と。

だが困ったことには、これでは嫖客と娼婦ならぬ素人男女の純愛物語になりかねない。では視角を変えて（云々）。

今井氏は、お力の人間らしい〈配慮〉を読みとったものの、〈娼婦〉らしくないからという理由で、これをしりぞけて、読みの方向を転換してしまった。しかし、嶺雲の〈同情〉論によれば、娼婦も〈まとも〉な〈配慮〉を表すことがあり、〈素人男女の純愛〉をすることもありうるのである。お力は、そのような人として描かれているのではなかろうか。

嶺雲の「にごりえ」に関する文章は、かって関良一が、[注4]これを取りあげて〈女侠説のちに経世家説〉を考える契機になったことがあった。関良一は、嶺雲のヒューマニズムを取りあげたのであったが、その傾向は、以後の嶺雲観にもみられるようである。山本洋氏は「『にごりえ』研究の先行文献」[注5]の中で、嶺雲の「一葉女史の『にごりえ』」は、

内田魯庵の、同題の文章「一葉女史の『にごり江』」[注6]を先蹤とする論であるとし、魯庵の〈同情説〉と〈ヒューマニティ論〉とを継承したものであると指摘した。いま、筆者にはこの点について反証する余裕はないが、少くとも〈同情〉論は、先に記した通りで嶺雲固有のものではないかと考えている。山本氏の他の嶺雲に触れた二論文は部分的な叙述に関するもので、「『にごりえ』の丸木橋」[注7]では、嶺雲が「にごりえ」のいわゆる〈独白夢遊〉場面の筆致について、〈神采の躍如〉、〈入神の筆〉と書いたことを、〈大仰〉であるから〈割り引きしなければならない〉と批判的意見を述べ、「『にごりえ』の終章」[注8]では、嶺雲の〈二者の対置〉に関する叙述の部分を引用しただけである。

伊狩章氏の[注9]次の論考も、嶺雲をヒューマニストと捉えているが、「にごりえ」の正当な論者であるとはみていない。

「にごりえ」には虐げられた女性へのヒューメエーンな同情がある。貧しき人々の歎きと訴えがある。だから田岡嶺雲は「吾人は頃日一葉女子が近作『にごりえ』を読みて、女史がかの醜悪卑陋の売春女の心事を描きて、而してこれに満腹の同情をそぞぎたるに服す。」（「境遇と霊性」「青年文」二八年十月）と人道主義の立場から讃辞を送ったのであろう。

もちろん嶺雲のこの考えも一つの見解ではあろうが、しかし、一葉の真意はもう少し奥深いところにあったのではなかろうか。

はたしてそうであろうか。「にごりえ」の意図について、嶺雲の〈同情〉論によって考えるならば、虚構によって、〈売春女〉にならなければならなかった女の、真実の〈心事を描〉いて〈満腹の同情を〉表している点にこそ、一葉の真意を読むことができるはずである。

次は鴎外の「にごりえ」評[注10]である。

濁江の境界は、東京市中到処に見出さるべき実際的に真なる境界なり。又お力の人物は、若し幕府の頃絶板せらるべき書を著したる人の孫なる血あり涙ある好固の一処女ありて、此境界に堕在せば、想ふに応に此の如くなるべしと、この作者の仮構せるところにして、よしや実際的に真ならざるも、必ず能く理想的に真なる人物なるべし。

明らかに、嶺雲のお力観と非常に接近した論である。鴎外の「たけくらべ」論を思い出せば、いくらか歯切れのよくない文章ではあるが、お力を同情的にうけとめているのには違いない。

本稿は、「にごりえ」を、嶺雲謂うところの〈同情〉を表現した小説であるとして、具体的な表現の特徴を叙述することを目的とするものである。

以下、語り（地の文と考えられる文）を中心にして、その〈視点の位置〉と、〈あはれ〉という語の用法に注目し

て考察を述べる。また、〈同情〉の論理によって終章を解釈する。

一、視点の位置

語りの視点を表していると解せる表現箇所に注目して、語り手像を想定してみると、語り手は、作品世界に内在する場合と、作品世界の外からの視点をもつ場合とがあるようである。前者では、登場人物の視点によるものと、作品世界の中で身体的に独立する視点との二通りを想定できる。

登場人物の視点というのは、例えば次に挙げるような例である。用例には、便宜のために番号をつけることにする。

(1) お高は往来の人のなきを見て、～と言ひながらお力を見れば烟管掃除に余念のなき（一）

右は、お高の視点によって語られた例である。ほかに、結城朝之助〈一節さむろう様子のみゆるに（二）〉、源七〈みれば茶椀と箸を其処に置いて（四）〉、お初〈見れば新開の日の出やがかてずいら（七）〉などの視点による語りの例もある。それぞれの登場人物を視点人物として語る方法である。しかし、お高と結城との視点には、語り手の〈同情〉の支配を受けたもののような印象を受ける。後に触れる通り多声的響きがあるからだと思われる。

次は、作品内に内在し、身体的に独立する語り手の例である。

(2) と店先に立って馴染らしき突かけ下駄の男をとらへて小言をいふやうな物の言ひぶり、腹も立たずか言訳しながら（一）

この語り手は、作品世界の中における自からの見聞を語る人であろう。〈らしき〉と〈か〉という語を用いてあるところから、この語り手の見聞には、ある限界があることを知る。その意味では不確実性を伴なった形である。同様の例は、〈二十の上を七つか十か（一）〉、〈遊ぶに屈強なる年頃なればにや（三）〉、〈お力も何処となく懐かしく思ふかして（三）〉、〈二十八か九にもなるべし（四）〉、〈鏡の前に涕ぐむもあるべし（五）〉、〈悪魔の生れ替りにはあるまじ（五）〉、〈溝の中にも落込むめり（七）〉などがある。例(2)は、第一章[注11]の冒頭部分である。この部分の語り手について、亀井秀雄氏は、次のように想定してみせた。

この語り手はむろんその場面に姿を現わすことはないのだが、いわば台所仕事に雇われた女がやや見識ぶって眺めているような表現であった。

〈台所仕事に雇われた女（以下に筆者は略して台所女と呼ぶことにする）〉という想定は特に視点の低さという点で卓見である。視点の低さは、〈同情〉を表現する上で重要なことだからである。

しかし、台所女の見識以上の、作品世界の外にいる者と

しての見識を語っていると想定できる箇所もある。語り手自身の、相対的な批評を語っているとみられるのである。また、次のように対句的な技巧を用いる語りの部分も、作品世界の外に在る語りであろう。

(3) 〜と店先に立って〜小言をいふやうな物の言ひぶり
〜と慰めるやうな朋輩の口振
〜かくては紅も厭やらしき物なり
〜言はずと知れし此あたりの姉さま風なり
お力と呼ばれたるは〜
お高といへるは〜

お力とお高とを、対照的に描写する場面ではこのように対句的な語りを構成しているのである。これと関連して、第一章の冒頭と第五章の冒頭との対応、第三章末と第四章末との対応があることも付記しておく。

相対的な批評を語る例は、たとえば、お力について、〈中肉の背恰好すらりつとして洗ひ髪の大嶋田に新わらのさわやかさ、〜思ひ切つたる大形の裕衣に引かけ帯は黒繻子と何やらのまがひ物、緋の平ぐけが背の処に見えて言はずと知れし此あたりの姉さま風なり〉と、裕衣・帯・平ぐけなどを新開地の特徴として並べ、〈此あたりの姉さま風〉であると批評している。菊の井の〈商売がら〉を批評する次の例も同様の視点である。

(4) 店は二間間口の二階作り、軒には御神燈さげて盛り塩景気よく、空壜か何か知らず、銘酒あまた棚の上にならべて帳場めきたる処もみゆ、勝手元には七輪を煽ぐ音折々に騒がしく、女主(あるじ)が手づから寄せ鍋茶椀むし位はなるも道理、表にかゝげし看板を見れば子細らしく御料理とぞしたゝめける、さりとて仕出し頼みに行たらば何とかいふらん、俄に今日品切れもをかしかるべく、女ならぬお客様は手前店へお出かけを願ひまするとも言ふにかたからん、世は御方便や商売がらを心得て口取り焼肴とあつらへに来る田舎ものもあらざりき（一）

店の外観と内情とに通じている語り手の巧みな語り口である。作品世界の外から作品世界を領袖する語りの姿勢を感じる。その特徴として、〈見れば〉という条件表現を挙げることにしよう。例(1)とその類例にも〈見れば〉という表現があった。これらの場合は、いま・ここにおける一回性の事件の契機的条件を表していた。しかし、例(4)の場合は、論理的でしかもいくらか抽象性のある条件を表しているようである。つまり、語り手の既知の知識を伝えているようでもあるし、語り手が、聞き手に向って、もしもあなたが見れば、という仮定の意味で用いているようでもある。つまり、語り手の既知の事実を基にした仮定条件をあらわしていると解せよう。

最後の一文に〈世は御方便や〉という慣用句があるが、相対的な批評の姿勢を示すことばであろう。文末の〈あらざりき〉という明確な提示にも同様の姿勢があると思われる。

以上の四例は、語りの視点を特徴的に表す部分を断片的にとりあげたものである。しかし、実際のところ、一葉の語りを文脈的流れでとらえるならば、これらの語りの視点は、単独の形で現れているのではなく、多かれ少なかれ作品世界を領袖する語りの支配があるとみられるところに特徴があるということになるのである。

前田愛は、「町の声」[注12]の中で、一葉の文体について、多声的（ポリフォニック）な語りであるとして、「大つごもり」以後の一葉は、〈作中人物の会話と語り＝地の文とを、微妙に書き分けることができるようになる。にもかかわらず、地の文は声を失っていないし、会話もまたその基調音として一葉自身の肉声が流れている〉と書いた。その通りなのだが、それに加えて、語りそれ自身にも二つの視点を重ねた形の多声的な響きがあるようである。次の文章から、この点を確かめてみる。

(5) ①お力といふは此家の一枚看板、年は随一若けれども客を呼ぶに妙ありて、さのみは愛想の嬉しがらせさ言ふやうにもなく我まゝ至極の身の振舞、②少し容貌の自慢かと思へば③小面が憎くい④と蔭口いふ朋輩もありけれど、⑤交際（つきあつ）ては存の外やさしい処があつて女ながらも離れともない心持がする、⑥あゝ心とて仕方のないもの面ざしが何処となく冴へて見えるは彼の子の本性が現はれるのであらう、⑦誰しも新開へ這入るほどの者で菊の井のお力を知らぬはあるまじ、⑧菊の井のお力か、お力の菊の井か、さても近来まれの拾ひもの、あの娘のお蔭で新開の光りが添はつた、抱へ主は神棚へさゝげて置いても宜い⑨とて軒並びの羨やみ種になりぬ（一）

右は、例(4)の店を呈示する語りの直後の、お力を呈示する語りである。①から⑨まで、私意によって番号をつけた。便宜上これを文番号とする。

文③における朋輩の蔭口と、文⑦・文⑧の近隣の風説をとり入れた語りである。会話と語りとの多声的響きは、例えば、文②の働きから感じられるのではなかろうか。即ち、文②は、文④へつづく語りとしても、文③へつづく会話としても働いていると解せるからである。

本題へ入ろう。文①・文④・文⑨は、明らかに語りである。これらには語りの多声的響きがあると感じられる。理由は、視点の交錯によるものであると言えよう。

文①の、〈此家の一枚看板〉と、文⑨の、〈軒並びの羨やみ種になりぬ〉とは、内容上から作品世界の外からの相対的な判断を語る視点によるものと見られ、互いに視点上の対応関係があるといえよう。しかし、文①の中には、

〈愛想の嬉しがらせを言〉う事に関する直の見聞と、〈我まゝ至極の身の振舞〉をすることについての直の見聞とを語る部分もある。この部分は、先に引用した〈台所女〉の視点であろう。したがって、文①には、作品世界に内在する視点と、作品世界の外からの視点とが混在していると言えよう。

次に、文④に注目してみる。文③の、朋輩の蔭口を聞く位置の語りである。また、文⑤・文⑥の会話の前置としての会話としても働いている。文⑤には、お力と〈交際〉する位置を示してある。文⑤は、朋輩と〈台所女〉との共通のお力観なのであろう。文⑥は、文⑤につづく、ひとつづきの会話であろうが、〈面ざし〉の〈冴へ〉によって、お力の〈心〉・〈本性〉の美しさに対する感動を表現する息づかいは、むしろ作者一葉自身の肉声の響きのようである。いずれにしても、このようにお力の精神美を賛美する視点の位置がお力と同じ低い位置からのものであるということが肝心なのである。

〈同情〉の表現としては、お力と交際する人によって、お力と同じ低い位置からお力の精神の美しさに対する感動を表現する形になっている点に、その特徴があり、真実性があるのだといえよう。

文⑨に眼を移そう。文⑨には、先に触れたように文①との対応がある。また、文⑨が受けている文は何か、を考えてみよう。直接に受けている文は、文⑦・文⑧の近隣の風説である。この文⑦・文⑧は、文⑤・文⑥のお力観に重ねる形で引かれた近隣の風説である。したがって、文⑨は、文⑤・文⑥と、その前置である文②・文③も受けているのである。

要するに、文⑨は、作品世界内の語りの視点と会話とを包みこんだ一つの帰結になっており、文①・文④・文⑨とつづく語りの流れは、語りそれ自身の多声的響をもって論理的に構築されているのである。その流れの中央に位置する、〈あゝ心とて仕方のないもの〉という文⑥の主情的表白は、同情の声として生きているのである。

二、〈あはれ〉と〈をかし〉

一葉の小説の中で用いられている〈あはれ〉という語は、登場人物に対する〈同情〉を表現することばとして印象的である。

以下、〈あはれ〉という語がどのように用いてあるのか、〈をかし〉と対比して検討する。

用例は、「にごりえ」のほか、参考のために「十三夜」と「たけくらべ」から取り出した。〈あはれ〉と〈をかし〉の出現回数を、語りと会話（心内語も含めて）に分けて表にまとめると次の通りである。

〈あわれ〉の出現回数

出現回数 作品名	語り	会話（心内語）	計
にごりえ	1	1	2
十三夜	4	0	4
たけくらべ	4	0	4
計	9	1	10

〈をかし〉の出現回数

出現回数 作品名	語り	会話（心内語）	計
にごりえ	2	2	4
十三夜	0	1	1
たけくらべ	15	8	23
計	17	11	28

数字の上から用法に特徴があるようである。〈あわれ〉は、語りの中で九回、心内語で一回用いられていて、会話には用いられていない。概して、語りに用いる語であると言えよう。〈をかし〉は、語りで一七回、会話（心内語）で一一回用いられているから、語りにも会話にも用いる語であると言える。

語りの中で用いてある〈あはれ〉と〈をかし〉について、対象とするものの違いを基にして分析してみると、以下に用例を挙げて示す通り、〈あはれ〉は、人物について、主人公ないしは中心的人物に対して用いてあり、〈をかし〉は、脇役的人物と場所に関わる事柄に対して用いてあるという区別がみられる。

(6) 女房はお初といひて二十八か九にもなるべし、貧にやつれたれば七つも年の多く見えて、お歯黒はまだらに生へ次第の眉毛みるかげもなく、洗ひざらしの鳴海の裕衣を前と後と切りかへて膝のあたりは目立たぬように小針のつぎ当、狭帯きりゝと締めて蝉表の内職、盆前よりかけて暑さの時分をこれが時よと大汗になりて（略）数のあがるを楽しみに脇目もふらぬ様あはれなり（四）

(7) つまらぬ、くだらぬ、面白くない、情ない悲しい心細い中に、何時まで私は止められて居るのかしら、これが一生か、一生がこれか、あゝ嫌だ〳〵（略）情けないとても誰れも哀れと思ふてくれる人はあるまじく（五）

「にごりえ」における〈あはれ〉の用例は、右の二例だけである。

例(6)では、お初に対する同情を表しているのだが、〈あはれなり〉ということばが受けとめている内実を考えてみると二面性があるようである。その一は、お初が貧にやつ

れているさまと眉毛やお歯黒の手入れもおろそかであるさまとを憐れに思うという意を表し、その二は、〈前と後を切りかへ〉て仕立直した〈洗ひざらしの〉裕衣を〈きりゝ〉と着こなして、〈大汗〉になりながら、〈脇目もふら〉ずに手を動かしている健気な女房の心意気に対する感動を表しているのである。また、〈これが時よ〉というお初の心内の思いも踏まえているわけで、〈あはれなり〉は、内からも外からも十分に共感しうる内容を受けとめている語りのことばである。

例(7)は、お力の心内語の中で用いてある〈あはれ〉である。先に触れたように、〈あはれ〉という語は、すべて主人公又は、お初の場合のように中心的人物に対して用いてある。この点から区別すれば、主人公お力について用いられた語であるといえる。しかし、他の九例が語りの中で用いられていたのに反して、この一例だけは、心内語になっている。理由については、お力の〈あはれ〉の内実を語りの筆舌に表す以上のものとしているのだと考えるのが妥当なのではないだろうか。なぜならば、お力は表面的には〈豪勢〉で、〈気のつよい子〉だと言われている。しかし、真実のところ、お力の胸中は、〈情なく悲しく心細い〉のである。お力のこの真情は、誰からも理解されない性質のものである。この〈あはれ〉の用法は、誰からも理解されることのないお力の真情を、その〈内奥を透して読者の前に露呈〉（嶺雲「一葉女史の『にごりえ』」）するための唯一の方法であった。語りとの多声的響きはこゝにも、もちろん感じられるので、その意味ではこの心内語も語りの同情と無関係ではありえない。

ところで、一葉の小説で、最も絶望の人として描かれているのは誰であろうか。嶺雲は次のように言う。

一葉はよく此絶望の人物を捉へ、これが性行を描くに当りて、これにそゝぐに溢るゝの同情と、湧くが如きの熱涙を以てす。その『濁江』のお力を見ずや、『十三夜』の高坂録之助を見ずや、『別れ道』のお京を見ずや、いづれも人生に絶望し、世をすね世を背きたるものにあらずや、而かもいづれも涙多く情ふかき感情の人に非ずや

（「一葉」、「青年文」明治二九年二月一〇日刊）

たしかに、お力も録之助もお京も絶望の人としての真情を〈同情〉によって描いたと言えよう。しかし、〈あはれ〉という語は、三人とも語りでは用いられていない。語りの中で〈あはれ〉という断を下すには、おのずから限界があるからにほかならない。

〈あはれ〉という語りが、しっくりと収まって響いてくるのは、「十三夜」のお関の場合である。四回用いてある。お関の心情を同情する語りで二回、父親の視点から、お関の心情を同情する語りで一回、その夜の情景を表す語りで一回である。

つまり、お関のあわれさは、お力のそれと比較すれば、〈あはれ〉という語によって表現することができる範囲の内実なのだということになろう。

「たけくらべ」の美登利の場合でも、同様の結論に到る。次の一例が美登利を〈哀なり〉と語る箇所である。

かゝる中にて朝夕を過ごせば、衣の白地の紅に染む事無理ならず（略）廓ことばを町にいふまで、去りとは恥かしからず思へるも哀なり（八）

これは、美登利が子供仲間の女王様としていきいきと描かれているときの評言である。美登利が終局の悲劇に当面したときには、〈あはれ〉という語を用いてはいない。

次は、「にごりえ」の語りにおける〈をかし〉の用例である。

(8) あきれたものだと笑ってお前などは其我まゝが通るから豪勢さ、此身になっては仕方がないと団扇を取って足元をあふぎながら、昔しは花よの言ひなし可笑しく（一）

(9) 表にかゝけし看板を見れば子細らしく御料理とぞしたゝめける、さりとて仕出し頼みに行たらば何とかいふらん、俄に今日品切れもをかしかるべく（一）

右の二例における〈をかし〉の意味を考えてみよう。例(8)の、お高について用いてある〈をかし〉は、いくらか曖昧で、ほゝえましいという意味であろう。「たけくらべ」では、語りの中で用いられている〈をかし〉は一五例ある。そのうち、一四例は同様の意味である。傍観的評語と言ってよいであろう。

例(9)の〈をかし〉は、前例とは異なり、明らかに批判的で、変だ、妙だという意味である。「たけくらべ」の類例は次の通りである。

娘は（略）提燈さげてちよこちよこ走りの修業、卒業して何にかなる、とかくは桧舞台と見たつるもをかしからずや（一）

例(9)では、新開地の銘酒屋を、「たけくらべ」では、大音寺前の風俗を、それぞれ批判しているのである。両者とも曲折しながら論理的に構築してある文章である。

以上から、〈あはれ〉は、主人公または中心的人物を内から外から詳しく描写して、その心情に対して主情的に同情を語ることばである。しかし、語りのことばとしての〈あはれ〉には限界もある。〈をかし〉は、人物について用いてある場合は、脇役に対して傍観的に曖昧な意味あいで用い、舞台に関しては、明確な批判を表現することもある、と言えよう。

三、四つの噂の必然性

終章の中心は、四つの噂話である。四つの噂は、四人の

人物による発言を偶然に耳にしたことを挙げたわけではなく、一章から七章までの内容から必然的に帰結する四種類の風説であるとみるのが適切である。

四つの噂を、慣例によって甲乙丙丁とし、それぞれの発言の必然性を確認してみよう。

甲の話題は、お力に焦点を当てたもので、お力の死を悼んで〈可愛さうな事をした〉という。第一に置かれるべき当然とも言える内容で、常識的な同情を表している。お力の真情に対する同情ではなく、皮相的な同情である。

乙は、心中死を、〈得心づく〉であるとし、〈義理にせまって遣った〉という。〈得心づく〉、つまり、合意の心中死であったという発言を直接に根拠を挙げて説明できるような字句を本文中に指摘することはできないが、〈得心づく〉であったろうと想像させるような暗示的語りがいくつかある。たとえば、先に対句的表現について述べたところで触れた箇所だが、三章と四章との各終りの部分もそうである。次の通りである。

(10) あの水菓子屋で桃を買ふ子がござんしよ、可愛らしき四つ計の、彼子が先刻の人のでござんす、あの小さな子心にもよく〳〵憎くいと思ふと見えて私の事をば鬼々といひまする、まあ其様な悪者に見えまするかとて、空を見あげてホッと息をつくさま、堪へかねたる様子は五音の調子にあらはれぬ（三）

何の此身になって今更何をおもふ物か、食がくへぬとても夫は身体の加減であらう、何も格別案じてくれるには及ばぬ故小僧も十分にやって呉れとて、ころりと横になって胸のあたりをはた〳〵と打あふぐ、蚊遣の烟にむせばぬまでも思ひにもえて身の暑げなり（四）

それぞれ章末に位置すること、〔会話＋とて＋語り〕の形になっていること、会話の内容に太吉に関することが含まれていることなど、形の上から対であることは明らかである。語りの部分の〈堪へかねたる様子〉と、〈思いにもえて〉とは、互いに呼応して、二人の心が同じ心境であることを想像させよう。

また、お力の源七への思いを〈持病〉といい、源七のお力への思いを〈例の〉、〈病ひ〉という言い方であったことも思い出せる。

次は、〈義理にせまって〉という語句の根拠であると考えられる語りである。

(11) 菊の井のお力とても悪魔の生れ替りにはあるまじ、さる子細あればこそ此処の流れに落こんで嘘のありたけ串談に其日を送って、情は吉野紙の薄物に、蛍の光ぴつかりとする斗、人の涕は百年も我まんして、我ゆゑ死ぬる人のありとも御愁傷さまと脇を向くつらさ他処目も養ひつらめ、さりとも折ふしは悲しき事恐ろし

き事胸にたゝまって、泣くにも人目を恥れば二階座敷の床の間に身を投ふして忍び音の憂き涕、これをば友朋輩に洩らさじと包むに根生のしっかりした、気のつよい子といふ者はあれど、障れば絶ゆる蛛の糸のはかない処を知る人はなかりき（五）

お力は、〈此処の流れ〉の中で、〈悪魔の生れ替り〉のような所業にあけくれている。しかし、お力の真情は、〈つらい〉のである。お力の心には、〈はかない〉ところがあるのである。お力は、〈さる子細〉があったから〈こそ此処の流れに落ちこん〉だのであり、環境に従った生き方を〈我まんし〉、〈つらさ〉を耐えているのであろう、と言っているので、お力が義理を知る普通の人間であることを暗に語っているのである。少し後にある心内語に、お力自身が〈人情しらず義理しらず其様な事も思ふまい〉と反語的に言う箇所があるが、これもお力の義理にこだわる心情を証左することばである。

また、係助詞〈こそ〉に注目してみると、〈此処の流れに落ちこん〉だというその事に対する語りの主情的同情の気持を感じとれる。〈こそ〉は、「にごりえ」では、他に〈立膝の無沙法さも咎める人のなきこそよけれ〉と、お力を語る箇所で用いてある。これに対して〈ぞ〉は、傍観的ないしは客観的語りの中で用いてあり、多くは、〈をかし〉と連動する形で用いてある。同情とは、論理よりも主情的に共感を感じとれるような表現によって表される性質ものなのであろう。

乙の発言は、論理的な根拠を問えば、最も弱い。しかし、お力に対する同情は、深いのである。乙は、お力への同情者である語り手その人であると考えられなくもない。あるいは、語り手の代弁者なのかも知れない。また、〈ございます〉という尊敬語を用いてお力に対する敬意を表している点も、同情の表現にほかならないはずである。

丙は、源七に対する同情者である。そして、お力に対しては、表面的な理解にとどまり、内面への同情には及ばないのである。〈何のあの阿魔が義理はりを知らうぞ〉という軽蔑のことばは、〈悪魔の生れ替り〉とも見えるようなお力の所業に対する発言である。

丁は、〈菊の井は大損であらう〉、〈取にがしては残念であらう〉という。この発言は、例(5)の末尾〈抱へ主は神棚へさゝげて置いても宜いとて軒並びの羨やみ種になりぬ〉と、二章末の、〈御祝義の余光（ひかり）としられて、後には力ちやん大明神様これにも有がたうの御礼山々〉とに対応する。諧謔を交えた語り口と、措辞の上で、〈取にが〉すと、〈拾ひもの〉という対応もある。丁は、お力に対する一般的世評に基づいた発言をしたのである。甲の発言が、第一に位置したものであるのに対応して、丁の発言は、結びに位置する性格の発言である。

以上によって、甲・丙・丁の三者は、お力に関する皮相的な発言者であり、乙は、お力の真情を深いところで理解して同情を表す発言者であると言える。更に、同情の上から、それぞれの発言を分析するならば、甲は、皮相的ながらお力にいくらか同情を表し、源七を軽蔑し、乙は、お力、ひいては源七に対して同情と尊敬を表し、丙は、お力を罵倒して、源七を尊敬する、という配分があることを見ることもできる。

次は、終章の結びである。

(12) 諸説みだれて取止めたる事なけれど、恨は長し人魂か何かしらず筋を引く光り物のお寺の山といふ小高き処より、折ふし飛べるを見し者ありと伝へぬ（終）

ここで、〈恨は長し〉という一句に注目したい。「長恨歌」に典拠をもつ句であって、心中死への哀悼の意を表していると考えることができよう。

一葉語彙としての〈恨〉については、稿を改めて論じるべき問題があろうが、筆者の調査した結果では、おどろおどろしい怨念を表す場合は、むしろ例外的用法であると言える。そして、恋情にかゝわる微妙な意味をもつ〈恨〉の例が多いのである。

一葉は、常套的に「長恨歌」の語句を用いている。〈連理の片枝「わかれ霜」（十三）〉、〈何の恨みや吊らふらん此処鴛鴦の塚の上に「わかれ霜」（十五）〉、また、「わかれ霜」という題名そのものも「長恨歌」に由来するという松坂俊夫氏の指摘もある。〈恨は長し「五月雨」（四）〉、〈比翼の鳥、連理の枝「経つくえ」（一）〉、〈揚家の娘君寵をうけてと長恨歌「たけくらべ」（八）〉、などを挙げることができる。

この一句が、お力の生と死とを同情する語りによって用いられていることを思えば、「長恨歌」の悲恋に重ね合わせた語りの同情の表現であると見ることもできるのではなかろうか。

まとめ

嶺雲の「一葉女史の『にごりえ』」は、トータルな「にごりえ」論として観るならば、「にごりえ」の読みを十分に書いていないという弱点がある。従来あまり重んじられなかった所以もこの点に原因がある。しかし、嶺雲固有の同情の小説論として、嶺雲の文学観と人間観が展開されている点に学ぶべきものがある。

「にごりえ」は、同情の小説論にいう通り、境遇の支配下から自由な精神の内奥の真実が活写されている小説である。主人公お力の人物像には、人間らしい美しさが彷彿する。

お力に対する同情とは、お力の内面の真実を理解することにほかならない。お力の内面の真実がどのように語られ

ているのか。表現上の特徴を以下にまとめることにする。

まず、語りの視点の位置を中心にしてまとめる。作品内で、登場人物に転身した視点と身体的に独立した視点とがある。作品外から作品世界を領袖して語る視点がある。しかし、作品内の視点と作品外の視点とは、単独ではなく作品世界の外の視点が全体を支配する形の多重性がある。

〈一節さむろう様子のみゆる〉という、お力の内面の美しさを暗示する表現には、朝之助の視点と作品外の語りとの多重性があり、お高の、〈小言をいふやうな物の言ひぶり〉に対して、お力は〈慰めるやうな〉〈口振〉と語られるところには、作品内において身体的に独立した視点と作品外からの語りとの多重性がある。後者には、朋輩に対するお力の思いやりが示されている。例(5)の場合、文⑥〈あゝ心とて仕方のないもの面ざしが何処となく冴へて見えるは彼の子の本性が現はれるのであらう〉という主情的な同情の表白は、お力と交際する低い位置からのものであることによって真実性がある。更に、文①・文④・文⑨とつづく語りの論理との多重性があることによって、より確からしさを増し加えた生きた同情の表現になっている。

次に、同情を直接に言い表す語〈あはれ〉の用法についてまとめる。

作品世界の外の視点からの語りの中で用いてある例は、「にごりえ」のお初（一）、「たけくらべ」の美登利（一）、「十三夜」のお関（二）である。その他、情景描写における三例がある。登場人物に転身した多声的語りの中では、「たけくらべ」の長吉（一）、「十三夜」のお関（一）がある。

お関については、合計三回用いてあり、数の上で突出している。お関の心情が〈あはれ〉という語で表現するのに適しているからである。お力については、語りではなく、心内語の中で〈誰れも哀れと思ふてくれる人はあるまじく〉という形で用いてあって、お力を〈あはれ〉と語っているのではない。お力の心情は、〈あはれ〉という語りでは言い表せない性質なのである。

お力についての一例だけが例外的な用法であることは、お力の絶望的心情を語りの筆舌に尽くすことのできないものであることを示しているのであって、お力への同情の表現として最も適切な方法であった。

四種類の噂話を、お力への同情を基準にして図式的にまとめるならば、甲は皮相的同情者、乙は真の同情者、丙は反同情者、丁は中立者であると言える。

「にごりえ」の終章を同情論によって解明するならば、乙の発言は、語りの同情を代弁するものであると考えられる。したがって、乙のいう通り、結局のところ、お力は、〈得心づく〉で源七の刃に倒れたのであると想像できる。

終章の結びの一節に〈恨は長し〉という一句がある。こ

れは、「長恨歌」に典拠のある句であって語りの同情の表現にほかならない。

以上、お力の内面的人間性の美しさを仄めかしてある箇所の表現の特徴をまとめてみた。これをトータルな「にごりえ」論へ向かうための、筆者にとっての道しるべの一つとしたい。

補注

1・「にごりえ」本文については、「文芸倶楽部」第一巻第九編の初出本文を定稿とするのが現状であるが、本稿ではあきらかな誤字脱字を正してある現行の筑摩書房刊「樋口一葉全集」第二巻所収の本文に拠った。但、山本洋氏の「校合校本『にごりえ』」（「文林」第二〇号、一九七九年、松蔭女子学院大学国文学研究室）と、「文芸倶楽部」初出本文とを参照し、文字遣いの不明な箇所は、用例として引用することを控えた。

2・引用文におけるルビ及び圏点等は、これを必要と思う最少限をのこして、多くを省略した。漢字の旧字体は、現行の字体に改めた。

注

1・田岡嶺雲「一葉」（「青年文」第三巻第一号、明治二九年二月一〇日刊。但、「田岡嶺雲全集」第二巻、法政大学出版局、一九八七年刊所収による。六頁）

2・田岡嶺雲「一葉女史の『にごりえ』」（「明治評論」第五巻第一号、明治二八年一二月一日刊。但、「田岡嶺雲全集」第一巻、法政大学出版局一九七三年刊による。四九三頁から五〇四頁まで）

3・今井泰子「『にごりえ』私解」（「吉田精一博士古稀記念・日本の近代文学――作家と作品」角川書店、一九七八年刊所載。三三頁）

4・関良一「一葉女侠説」（「樋口一葉ー考証と試論」有精堂、一九八〇年刊所収。三九五頁）

5・山本洋「『にごりえ』研究の先行文献（上）」（「文林」第二〇号、一九八〇年三月、松蔭女子学院大学）

6・内田魯庵「一葉女史の『にごり江』」（「国民之友」第二六六号、明治二八年一〇月一九日刊）

7・山本洋「『にごりえ』の丸木橋」（「国語国文」第四七巻第四号、五二四号、一九七八年四月、京都大学）

8・山本洋「『にごりえ』の終章」（「論集日本文学日本語」4、角川書店、一九七八年刊所載。二五九頁）

9・伊狩章「樋口一葉の生活意識その二」（「国文学会誌」第二〇号、一九七六年一〇月、新潟大学）

10・森鴎外「雲中語」（「めさまし草」巻三一四、明治三〇年二月刊、但、「鴎外全集」岩波書店、一九七

三年刊所収による。二五二頁）

11・亀井秀雄「非行としての情死」（「群像」一九八一年四月刊。但、「感性の変革」講談社、一九八三年刊所収による。一五四頁から一五五頁まで）

12・前田愛「町の声」（原題「一葉の文体をめぐって―語りの構造」、「国文学」一九八〇年一二月刊。但、「都市空間のなかの文学」筑摩書房、一九八四年刊所収による。三一九頁）

彙報

I　卒業論文題目

〔一九八七年度〕

梶山雅史「中島敦論――『李陵』を中心として――」

有好恵美「勅撰集にみられる『音』について」

磯辺悌志「比喩の研究――川端康成の作品を対象として――」

河野淳「瀬戸内臨海都市の海域への拡大」

下松慈明「広島市の都市周辺部における住宅地化」

戸上武「都市内部構造と都市交通に関する考察」

蓮井知子「現代日本児童文学研究――松谷みよ子の幼年童話を中心に――」

福田智恵「狂言における敬語表現の研究」

〔一九八八年度〕

波呂純子「『筑豊』に関する地域研究」

森重美紀「近世中期における芸備島嶼の村落構造」

岩井まほろ「広島における野坡流俳諧――定着の様相について――」

香月美和子「近世厳島における史跡・名勝――その成立過程の様想について――」

（二九頁へ続く）